

渡辺広士

小林秀雄と瀧口修造



〔訳者紹介〕

1929年生れ。東大仏文卒。法政大教授。

著書 「野間宏論」「カフカー途方もない闘い」
「文学の問い」「『豊饒の海』論」「現代への旅」
「危機の文学」他。

訳書 「ロートレアモン全集」「精神の大試
煉」(H. ミシエー) 他。



審美文庫 27

小林秀雄と瀧口修造

著者 渡辺 広 士

発行者 荏 澤 謙

印刷 橋本 伝 四 郎

製本 三 浦 堯

一九七六年七月五日 印刷
一九七六年七月十日 発行

発行所
審 美 社

113 東京都文京区本郷一丁目28番27
振替東京五十七二二七五番

渡辺広士

小林秀雄と瀧口修造

審美文庫

目次

小林秀雄のランボー体験 7

小林秀雄と西欧 31

瀧口修造と小林秀雄 43

瀧口修造 —— 不可能の思考者 56

小林秀雄と言葉の問題 67

あとがき 95

小林秀雄と瀧口修造

小林秀雄のランボー体験

I

戦後に出た小林秀雄批判の中で、本多秋五の「小林秀雄論」はぼくの知る限りでもっともよく文学者小林の思想を批判している。ほかに橋川文三、丸山真男、竹内好らの政治思想的視野からの批判も示唆に富んでいるが、小林の芸術思想には深く入っていない。本多の論はその欠陥を免れているが、ただ不満は、小林の思想形成の上で重要なランボー体験について全く触れていないことである。

小林自身がいつているように、ランボーは彼にとってへ一つの事件であった。それだけではない。本多は「無常といふ事」の地点をとらえて「小林秀雄は志賀直哉に出發して志賀直哉に帰着した」といったが、ぼくならば「小林秀雄はランボーに出發してランボーに帰着した」といいたい。もちろんこれは誇張したい方だが、ランボオ論三つが彼の活動の象徴的な地点にあることを確認しながら、そこにあらわれた思想を彼の思想活動全体の流れに関連づけてみると、多くの

ことが明らかにするはずだ。

象徴的な地点というのはこうだ。ランボオIが書かれたのは昭和元年、二十五歳、小林秀雄のほとんど最初の告白的評論である。これ以前には「一つの脳髓」「女とポンキン」という小説と、長谷川泰子を間にはさんだ中原中也との三角関係という人生上の苦悩とがある。〈四年たった〉という一句で始まるIIは昭和五年、この前年には小林は「様々なる意匠」を書き、小説家または詩人になるという気持を棄てて評論家としての出発を決めている。IIIは二十三年に書かれた。これは戦後の小林の思想を明確に語っている。小林がこれだけの間を置いて三回も一人の文学者について語ったのはドストエフスキーを除けばランボーだけだ。ランボーは小林の青春であった。そしてまた五十歳に近くなって、歴史の苦汁の中で裸になって立ち帰った地点でもあった。

へ僕が、はじめてランボオに出くわしたのは、廿三才の春であったと小林はIIIで書いている。それまでの小林は富永太郎の影響によってボードレールにとらえられていた。へボードレールの「悪の華」が、僕の心を一杯にしてゐた。と言ふよりも、この比類なく精巧に仕上げられた球体のなかに、僕は虫の様に閉ぢ込められてゐた、と言った方がいい。そして更にこうも書いている。

へ僕は、自分に詩を書く能力があるとは少しも信じてゐなかつたし、詩について何等明らかな概念を持つてゐたわけではない。ただ「悪の華」といふ辛辣な憂鬱な世界には、裸にされたあらゆる人間劇が圧縮されてゐる様に見える、それで僕には十分だったのである。

〈閉じ込められて〉という意識は、ランボーの開かれた爆発的なポエジイに触れてからやってきた自意識に違いない。

ボードレールはフランス二月革命の時期を間にはさんだ四十六年の生涯を生き、群衆の中の孤独と、人工美の天国と、パリの頹廢的生活を歌って、失語症と孤独の中に死んだ。この、生涯を倦怠に悩みながら自分という痼疾から脱け出そうとしなかった詩人に対する、若くしてすでに生活苦に悩みぬいていた日本のインテリ青年小林秀雄の共感、ある限度にとどまったのは無理もない。当時の小林の憂鬱は「一ツの脳髓」に書かれているように、手ひどいものである。群衆の中や詩の中へ逃れるすべはなかったろう。

三年前父が死んで間もなく、母が咯血した。私は、母の病気の心配、自分の痛い神経衰弱、或る女との関係、家の物質上の不如意、等の事で困憊してゐた。私はその当時の事を書きたいと思った。然し書き出して見ると自分が物事を判然と視てゐない事に驚いた。外界と区切りをつけた幕の中で憂鬱を振り廻してゐる自分の姿に腹を立てては失敗した。自分だけで呑み込んでゐる切れ切れの夢の様な断片が出来る上ると破り捨てた。

小林はおそらく、志賀直哉のように書くことによって、この背負いかねる人生苦から自由になろうとあがいていたのだろう。

ランボーに出会ったのはこの時期だ。「地獄の季節」一巻を手にして小林が受けた衝撃はⅢに

こう記されている。

「生活は、突如として、決定的に不可解なものとなり、僕は自分の無力と周囲の文学の経験主義に対する侮辱感とを、当てどもない不幸の裡に痛感した」

小林はⅡでもこう書いている。

「私は彼の白鳥の歌を、のっけに聞いて了った。「酩酊の船」の悲劇に陶醉する前に、詩との絶縁状の「身を引き裂かれる不幸」を見せられた。以来、私は口を噤むだ。いやいや、ただ、私の弱貧の爲にも、私は口を噤むで来た筈だ」

「宿命」〈絶対〉という言葉を核にしたⅠもまた、全篇がその衝撃の告白だといえる。このような衝撃を小林に与えたランボーとは何者だろうか？

ランボーが何者かは、「地獄の季節」一篇を読んでなんの衝撃も受けない者にはわからない、というほかない一面がある。ランボーの文学は青春期において触れるより理解しようのない文学だ。ランボーほど伝説を持った文学者はいない。パリ・コンミューンの時代に十七歳でなん度も家出放浪し、しかも弱年にして恐るべき詩的成熟に達しながら、詩壇での栄光を軽蔑してアフリカへ去ったこの天才詩人に、数々の伝説が作りあげられたのは不思議ではない。伝説の第一は天

才の文学的自殺にまつわるものだ。これは「地獄の季節」に無類の輝きを与えたが、小林のIにも「吾々は彼の絶作『地獄の季節』の魔力が、この作品後、彼が若し一行でも書く事をしたらこの作は諒解出来ないものとなると云ふ事実にある事を忘れてはならない」という言葉が、大きな比重をもって記されている。ところが一九四九年にブイヤヌ・ド・ラコストの精密な研究が出て、「イリュミナション」の大部分が「地獄の季節」の後に書かれたことを明らかにした。ラコストはまた、ランボーが「地獄の季節」を全部焼き捨てようとしたという伝説も否定し、焼かれたのはほんの一部分であることを証明した。

伝説は幾分修正されたが、それによってランボーの詩の光がうすれたわけではない。小林はランボーを「聖化」したが、そのランボー論が根底からくつがえったわけではない。なぜなら、このようなランボー「聖化」を要求したのは「地獄の季節」の文学的世界そのものだから。小林にとっては、ランボーがあのような天才にも拘らず「文学」を放棄して出発したという行動が衝撃的だった。しかも、そのような行動の絶対化の根拠は、「地獄の季節」が定着した強烈な文学的世界にはかならなかった。「文学」の極端な追求が文学の放棄を宿命づける。小林はそれを「極点の文学」とよんだが、この「極点の文学」はモーリス・ブランショの言葉を借りれば、「人間がどこかへゆき、自分以上のものになり、自分に見えないものが見え、自分には分からないものが分る」ことを、いいかえれば「生命のすべてや存在のすべてに関する経験を文学から作り出すこと」を企てていたのである。

小林が富永太郎にあてて「地獄の季節」の中の最後の章「別れ」を写して送ったというのは、

なにが最も彼の心に触れたかを語っている。それは次のとおりだ。

へもう秋か。——それにしても何故に永遠の太陽を惜むのか、俺達はきよらかな光の発見を心ざす身ではないのか——季節の上に死滅する人々からは遠く離れて。……俺はありとある祭を、勝利を、劇を創った。新しい花を、新しい肉を、新しい言葉を発明しようと努めた。この世を絶した力を得たと信じた。扨て、今、俺の数々の想像と追憶とを葬らねばならない。……この俺、嘗つては自ら全道徳を免除された道士とも天使とも思った俺が、今、務めを捜さうと、この粗々しい現実を抱きしめようと、土に還る。

この象徴的な言葉は、まさにこの後にへ一行も書かれてはならない。出発の歌なのだ。これが現実脱出を夢みる知的青年に出発を焚きつけないはずはない。小林が「地獄の季節」一篇とそれを「聖化」したランボーの「出発」を前にして、〈自分の無力〉の意識と〈周囲の文学の経験主義〉から脱出しなければならぬと感じたのは当然だった。

ランボーに示唆された小林の出発、それはどこへだっただろうか？ 江藤淳の「小林秀雄」に詳細な伝記的研究があるので、これを借りると、小林は大正十四年八月に大島へ単身旅行し、そこで自殺を試みたらしい。この時、長谷川泰子をはさんで中原中也との三角関係にあり、小林は泰子を連れて大島へ駆落ちするはずだったという。「Xへの手紙」に書かれた「一度は退屈のために、一度は女のため」という二度の自殺未遂の後の方に当たるらしい。自殺願望の理由を結

局は「女のため」というわけだが、ランボーもまた小林の耳に死への出発を囁かなかったはずはない、とぼくは推測する。およそ自意識の強い青年にとって、「お前は何のために生きているのか？ 何のために生きて意味のない愚行をくりかえしているのか？」という問いが、自分の中から聞えてこないはずはないのだ。泰子との恋愛で「実につらい」「私は泣いた」などとノートに書いた小林は、ランボーによって、自己否定、自己破壊の狂暴な欲求を覚まされたと思われる。ランボーは小林に「どうしてお前は出発しないのか」と悪魔の声で囁いていたに違いない。文学への執着も恋愛の苦悩も、ランボーの「極点の文学」の前では「無力」と感じられたろう。

できるならば、ランボーのように出発すべきだ。しかし、どこへ？ 小林秀雄にはアフリカの砂漠もなければパリ・コンミュンもない。出発できるのは「死」の虚無の中へでしかない。この場合、見落してならないことは、小林の自意識の中では決定的に出発に駆り立てるものが文学でなければならぬ、ということだ。彼はランボーの文学が「出発の理論であったように、自分の死を必然とする『自殺の理論』を作らなければならなかった。『自殺の理論』とは文学でなくてなんであらう。

小林は自殺に失敗した大島から「自殺の理論」だけを持って帰ったと思われる。小林が死ななかった理由は推測してもしかたがない。崖の上に立って、なぜ足が大地を離れなかったか、最後に支配したのは生への執着だったか死への恐怖だったか、それはわれわれが考えることのできないことに属している。ぼくらが考えうるのは、ただ自殺未遂者が後に自らに与える失敗の理由づけの中にある真実である。

自殺に失敗した小林秀雄は昭和二年に書いた「芥川龍之介の美神と宿命」という評論と、非公開の原稿の中で、自殺に失敗した自己を否定している。前者は芥川の自殺を〈自殺の理論〉に導かれた宿命的な自殺ではないという理由で批判した（自殺を批判した、とはおかしい方だが）。後者にはもっと注目すべき記述がある。これも江藤淳の本の中から引用させてもらうが、一つは自殺失敗の理由づけである。

〈俺は晴れた美しい空を目に浮かべてゐた。処が目をさますと曇つてゐたのだ。それで何もかもめっちゃくちやになつた〉

もう一つは〈深淵〉と生活の矛盾の指摘である。

〈もしこの深淵（思考と行動の間の）が人間の宿命ならこの宿命を覗いた男に而も覗いて生活をとめる事を許されてゐない男に人生が如何に狂気染みてゐようと同じ事ではないか？〉

これらのデータはまず、小林が自殺を、すっかりさめた自意識の統制の下に決行しようと氣負つていたことを、示している。自殺は〈宿命〉の完成となるべき〈出発〉だから衝動的になされてはならないのである。

完全に冷静な自意識を失わないままに自殺することが可能かという問いは、ドストエフスキー

が「悪霊」のキリーロフに与えた問題であった。キリーロフはとにかく自殺した。小林は自殺失敗を「曇った空」のせいになしようと試みた。「自殺の理論」が敗れたのではない。「宿命」が敗北したのではない。もちろん自分が臆病だったのでもない。自然の条件が彼の審美学に合わなかったのだ、と考える青年は、いく通りも可能な理由づけの中から、自らその一つを選んで自己を欺く。「死にそこないめ」という自意識をだます必要があるからだ。彼はその内なる声に答える、「又僕はやり直す事にする」と。これがあらゆる自殺失敗者が試みる自己に対する奸計でなくしてなんであろう。いずれにしても、自殺の失敗という事実は小林の人生の歴史の上に、消すことのできない一点を残したのだ。

さっき引用したもう一つの言葉を見よう。宿命を「覗いて生活をとめる事を許されてゐない男に人生が如何に狂気染みてゐようと同じではないか」と小林は書いていた。「宿命」とは思考と行動の間の深淵、つまり自殺の理論とその実行との食い違いである。理論と実行とは食い違いを生じた。小林はその結果を「生活をとめる事を許されない」というふうに表現しようとする。「生活」が理論にうち克って強制され、とめることを「許されない」というのだ。すべては自分のせいじゃない。彼に発表を許さない何者かのせいなのだ。彼がとめることを許されなかった「生活」の連続性は、これもまた彼の弱気を選んだのではなく、「宿命」とならなければならぬ。だから、彼が救いを求める「晴れた空」が欠けていたからという審美的条件は、いわば死にすぎりついた「理由づけ」である。「自殺の理論」の中では、美は余裕どころではなく、生の本質的条件となる。